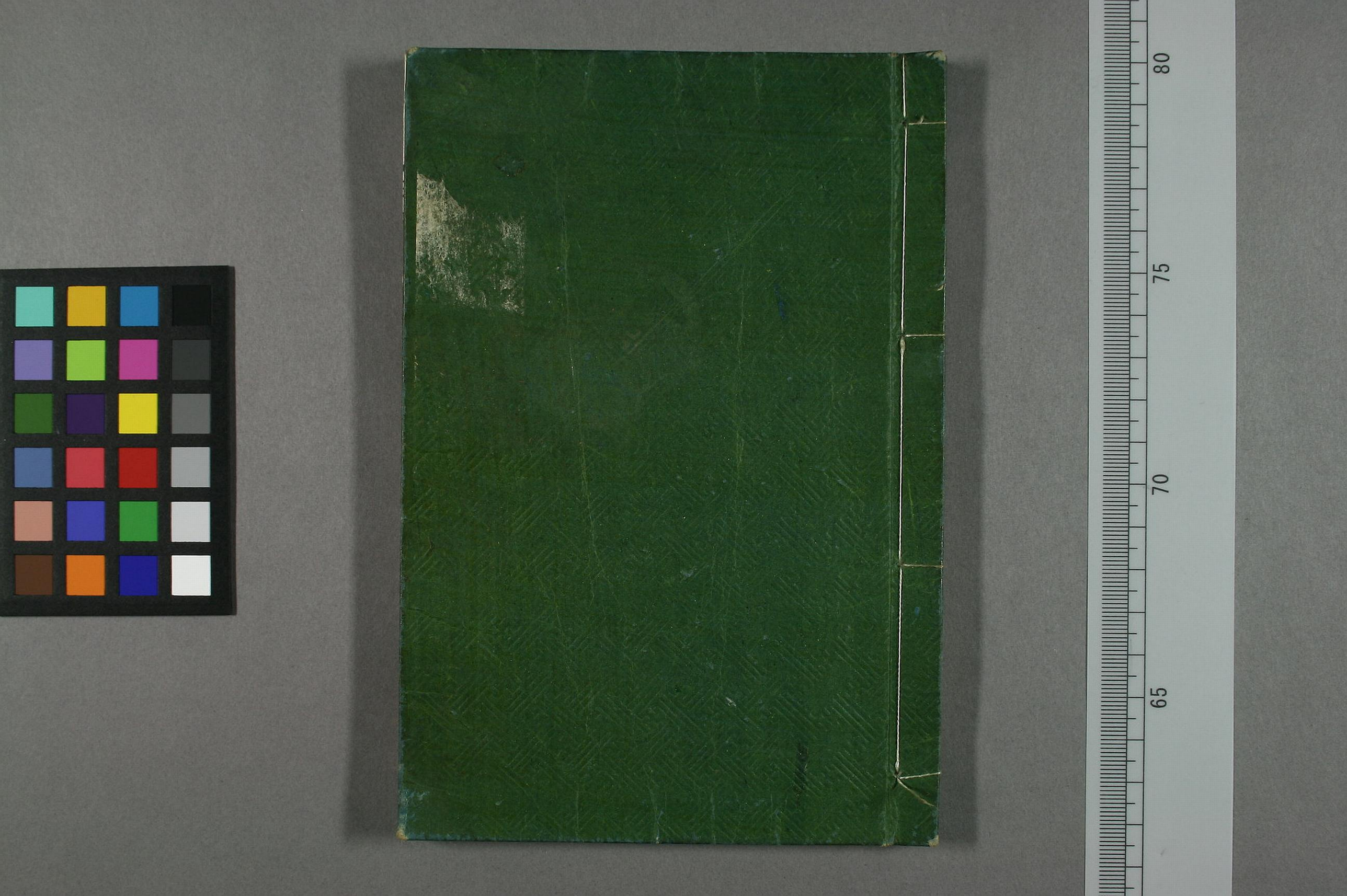

80
75
70
65

A557
14

通俗日本小史七編之下

東京　渋崎延房撰閲
渡邊文京操觚

去程よ舟田義昌へ義貞の密旨を奉ト高野の山谷を経廻りつ漸やゝ大塔宮を捜ねなて委細く義貞の内意を傳へ願ふを宮の命令を得て義兵と東よ挙げんとらゝ其趣ぶたを云々と聞く宮ゐも豫てより新田氏の名族なる彼知るゞゆゑよ今招ゐぎゝく勤王の順よ帰せゝぞ嬉しくれと欣ぶと浅

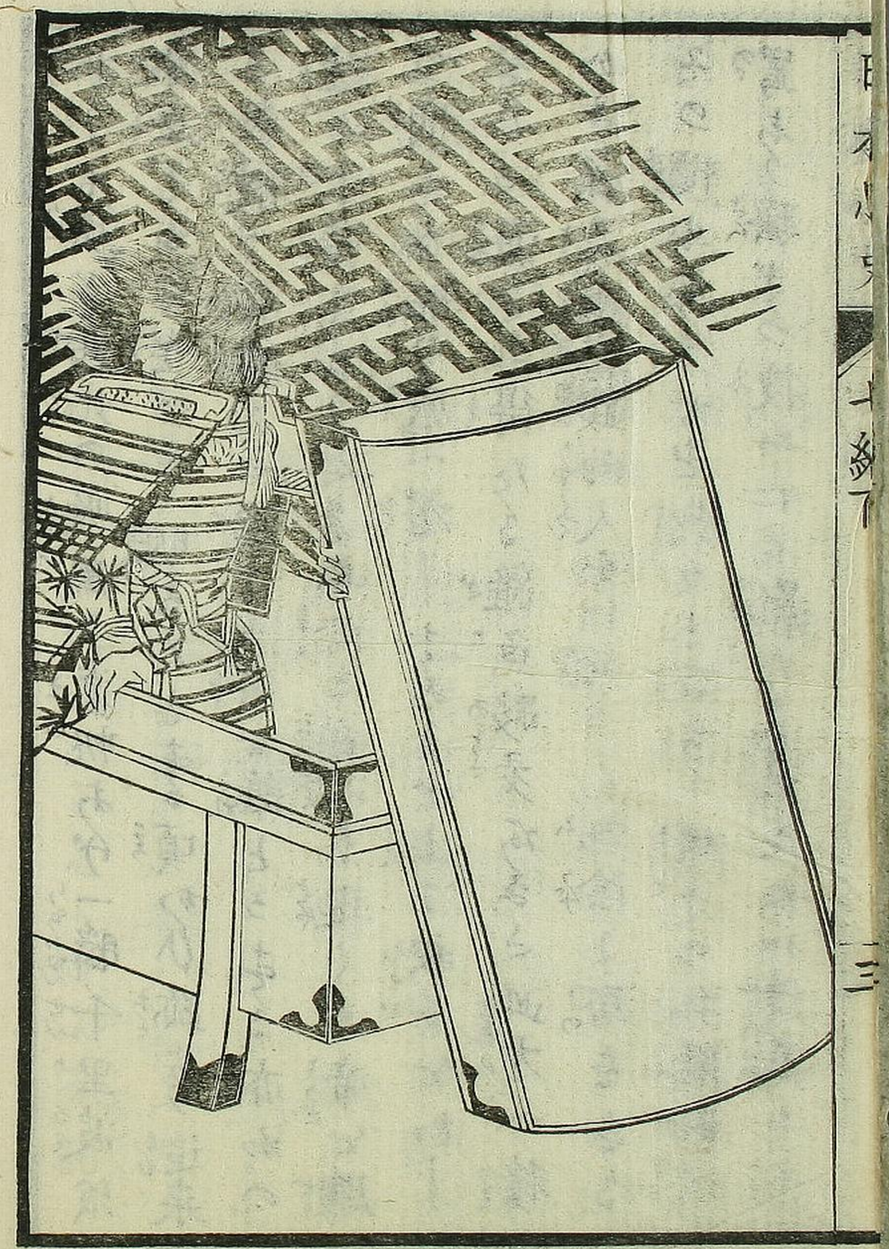
48-9445

いかで権に詔辭に擬らへて賊を討つの令旨を賜
ふかゝる不思議の天恩を奉戴なせし上からハ何条
猶豫あるべからん吾意爰に決せりと義貞感喜意外
に出でその翌日病痾起り軍務に従事志がたき旨
高時が許に詐なり報じそのまゝ手兵を引率て領
國上野へ帰着なし弟脇屋義助子の義顕等と義兵
を挙るの策畧におさく思慮を焦しゐる」話頭復前
齣北條氏ハ輓今諸國に義兵蜂起し天下に勤王の
者多きを以て萬一帝を敵方に奪ハるゝ事あらバ

油々しき大事に及ぶべし其許等の準備なくんぞ
あるぞと隠岐の守護たる佐々木清高に命じてま
そく防禦を厳重にし嘗て油断なさざりしが清
高の一族多田義綱陰かに官軍に心を通じ只管帝
を奪ひ去らんと源の忠顕と力を戮せたる夜守兵
の透を窺ひ難なく帝を出しまゐらせ鸞輿さん
もあらざれバ君臣併せて只三人恐れ多くも九重
の聖位高き後醍醐帝の徒歩にて逃れ去りたまひ
土民を雇ふて案内者となし海路よりして逃れん

と千波の港より辿りつゝ船もやなるゝと見るゝせば
遙ゝ彼方の沖合より漂ふ漁船一艘なりけるを屈竟
と呼寄せつゝ忠顕詞を和らげゝ如何ゝ舟人よく聞
きよ是ゝ渡らせたまふゝかん方を恐れ多くも一天
萬乘の御位に在ます今上皇帝ゝ候らふぞや輓今
逆臣猛威と振ひ為ゝ幽閉されたまひしと辛くも
逃れ去りたまふゝ海路ゝ備ふ汝の舟をやく漕よせ
候らへと少しも隠さゞ誠を告まゐ舟人等いたく
感激の涙ゝくて剛毅木訥唯々とをうゝ承諾し

折しも風を西北の順風ゝ真帆あげ一瞬千里波荒
蹴立てくゝ空のやゝ明るんとする頃あひ跡より追来
る數艘の兵艦ゝの隊の大将を誰とうまる亦かの
佐々木清高なり逃れぬ処と舟人を迫くも帝を胴
の間なる船の底へ潜しまゐらせ上ゝ板子をおし
ゝらべ漁どり得たる雜魚殿者なるさ此方へ積
かさね義綱忠顕両人をゝ同ゝく帆陰ゝ潜をまる
その間もなゝ せゞ先々と取まく追手の兵艦數艘
罵ゝり騒ぎつゝ捜ぬれど影だゝ見えねゞ清高を声



般若寺の経
櫃幸ひ金
玉の御躰を
躰を

いらつげて詰るやうや舟人知らざるや吾ら監守り奉まつる先帝及び侍臣等両人過刺護衛の透を窺ひ逃れて走りたまふがゆゑに追止んとて来りしあり必ず海路を渉りしあらん汝等定めて見認めしるべし包まず語り聞せよといふに黙頭舟人そ濁たる声音をいなげて如何ぞも先刺怪しき船ようち乗る三人の風俗い京師の装束何とる奥床しくも尊とくて凡人にあらずと思ひしが公が尋ねる人々へ必定彼等に相違なし未だ遠くい

行ぬうちに急ぎ追ひ捕へ得べし東の方へと航りしあれを彼方をさしてと追たまへ早くくと急立る詞に清高應へそいらへぞ楫とり直して東の方波を蹴立て走去る君臣三人を虎口を逃れ互ひにホッと吐く呼吸の九死を出て一生を得たる欣喜とに角と匹夫に希有なる舟人が智言を深く稱賛し彼是ともそうら船をもや名和の港（伯耆の国）に着しなべ忠顕まづ岸に登り州の豪族名和氏に至り直ちに詔言を傳達したり名和氏を本姓村上氏にして

世々伯耆の名和に居り往昔承久の役に名和行秋
なるものの孫行高と諸とめふ官軍に屬せしみ事
破るく敢なくも二人齊しく戰死の名のみ殘り
遺念の四子ゆり長高長重長生氏高といづれ
も文武の才器に富み大りに為さるの志ざしなり
時しも此日を長重ゲ誕辰の祝儀とて兄弟四人打
集ひ水さゆくぬ骨肉のいと睦まき酒宴央思ひ
ゲみあれ忠顕ゲ傳ふる倫旨を奉聞し一トたび驚
き一トたびい欣あび思ひ難く顔見なるを兎角の勅

答に差詰り默然として居る中ゆ長重獨り進み出
阿兄を何をう孤疑したまふ今忝なくも帝王の依
托を受しい武門の面目家の名誉事の成と否とに
関せぎ名を天下に揚ろふ足るべしいかくまで厚き恩
命といりでこの否み奉まつりんと義を見て勇む長
重ゲ詞に忽ち長高も有理と心を決しつ兄弟四
人一様に甲冑穿曹を戴き戎裝凛々しく裝立て
港に至りて御舟の傍に跪きたるその況を打
見て帝い欣然と長重等ゲ迎ふるまゆく船上山へ

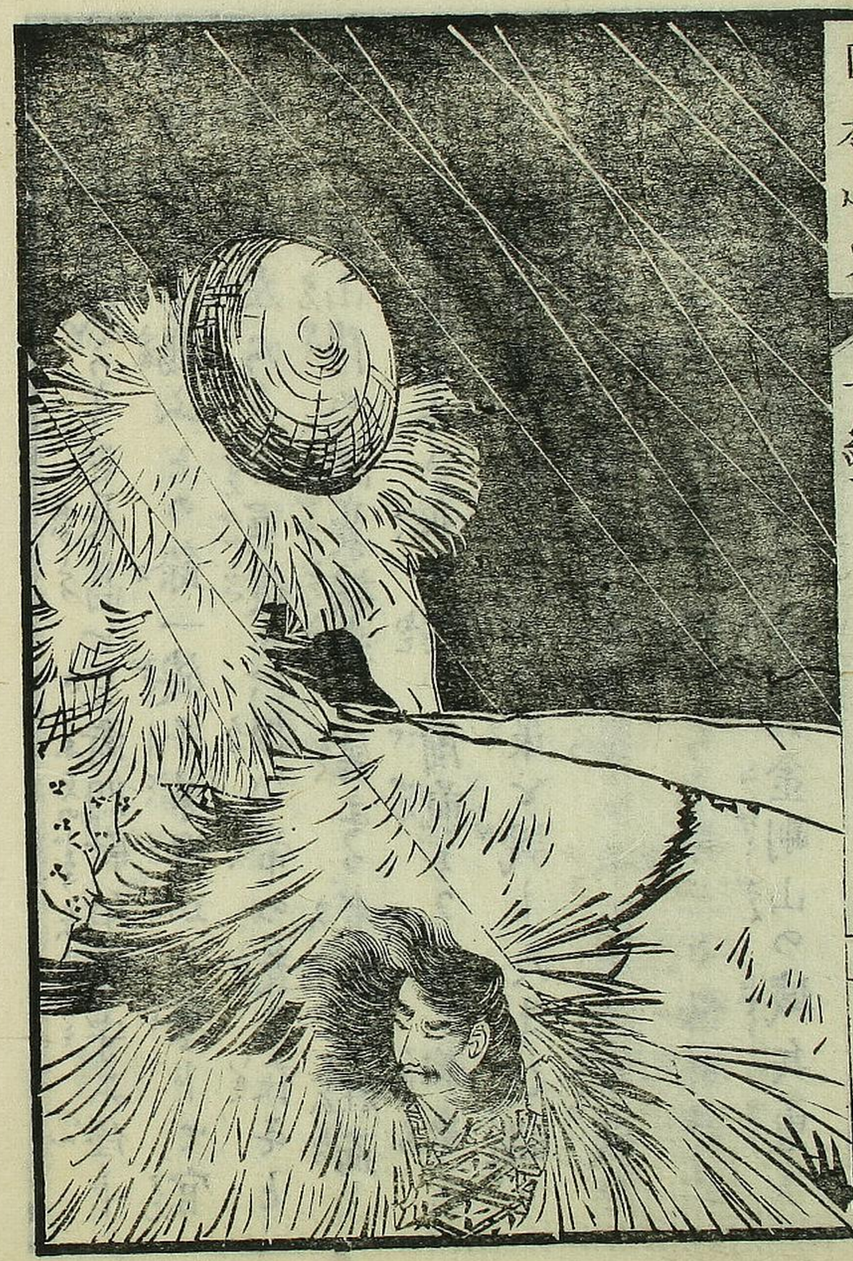
行在所となる村民を募りて米粟を山上に運び以て兵粮に充るものゝ見兵僅に百五十騎乃ち盡々くその宅を焼き決死の覚悟目ざましく立樹に因て柵を植て白布の旗数百を造り近国諸豪傑の章識と記し彼方此方の山間に立つら新たる疑兵の謀略颯と吹おろす山風に靡くやうをそ皇運の挽回まゝき時なるうる望をび迅くも去の事を聞き驚つく賊将清高兵三千を率ゐて押よせ来り山の周囲をとり巻つ前後ろして攻撃の準備全

さく整ひしが彼旗章を見るよりも怪しと疑ひの敢て進まゞ謀り果せず官軍の林のうちに潜伏く射出る矢も雨のごとく此隊の賊将何某をこゝで一矢に撃取たる猛勇無類の弓勢に賊軍膽を奪いれく降参るもその八百餘騎清高山の背後に在りてかゝる事ども知らざれば新兵といひかゝえ急に攻むれ折しも一天かゝる雲りに沛然として雲起り油然として雨烈しく雷さへいさく鳴ちゝめた天地も崩るゝ震動を事ともせざる両軍が雨を犯しく

奮擊突戰矢叫び太刀音凄まじく死を決めたる官軍が猛勢かなうも破竹のおとく順逆いうべう敵し得ん賊軍忽ち碎易して十又余り人退く敵軍愚精妙き長重長生勝機ハ爰ぞと烈しき指揮を勇を立てる官軍ハ勝に乘じて攻撃みぞおちが為に賊軍ハ大いに敗北を撃るゝなり先を爭ひ逃んとする千仞の壑に轉び落ち骨折け脳碎けて死せる者二千余人賊將清高ゑ一騎こうくも其場を切り拔つ京師をさして逃去ぬ官軍全勝を博せり

を帝叡感浅からぬを長高を左衛門尉伯耆守に任じ名を長年と賜ふその餘一族子弟戰功に應じて官に拜せる差なり官軍復ひ振ひ帝の爰に在せと聞き山陰山陽の諸豪族来り屬する者數十姓而して兒島高德もまた兵を起し備前より馳參り軍畧既に整ひこうべ進取の策を議したまひ詔りして源忠顕を大將とし高德等を率ゐて六波羅を攻んと進んで行程に馳加くる兵三万餘騎進んで峯堂に陣を愛にまた高時ハ金剛山の城兵勇に

一片の漁舟
辛玉鮒を全ふす



して能く戦ひ加ふるに正成の智畧なるを以てまづく
寄手を悩ましめ落去の形況なるのみう曠日持
久に渉るとても内変なるんも測られぬ如き寸時
も迅うに正成ぞに滅ぼされを自余の官軍自らに潰
え去らんと必せりと足利高氏北條高家を將とし
援兵數万を率ゐて金剛山へと向ひしむ高氏意両
端を持ち躊躇して未だ決せず進みて京師に入る
頃及恰も忠顕高徳等ぞ官軍礮と行なひ両軍るん
でう猶豫ぞに忽ち兵端を開きて接戦未だ決せ

らぎ勢ひ鋭どに官軍に賊の先鋒高家を左右まく
破殺したりしうべ高氏爰に心を決し乃ち官軍
に帰順しく俱に京師に攻入りつ遂に迫りく六波
羅を囲みいとも激しく攻たてらに賊軍防禦の策
尽きく二帥俱に擊とうに京師に奏し賊の隻騎なく
而しく金剛山を囲む賊軍も京師の敗報を聞怖し
く囲みを解く潰散せしより正成漸やく出るを得
うう是に於て天皇闕に還ると議したまひ建武元
年五月二十三日車駕名和氏の許を発したまへ長

年劍を帶て帝の右に侍り百官ゝみな戎服を穿ち前駈後從威儀堂々列を正しく護衛の官軍天日再び爰に光り弧放ち千代を壽ぶく凱歌の行裝実に目醒しくも見えそろりかくて車駕播磨路にかゝりし時新田義貞使者を馳せ鎌倉の捷を報じ奏ていはく先新田義貞ハ護良親王の令旨を得て義挙の檄を堅め準備閑あらたその折ふし高時関東の諸氏に命ゝて兵糧を徵し新田氏の食邑冨饒なるの故をもて六十万錢を賦課し一つ五日を限りて調達せよと催促甚だ厳重なり義貞奮然と怒ッて曰く奴輩みんな無状なる兵糧を吾に用ゆるを賊の催促に應ぜたと高時の使者を捕へて斬に憂しその首を里門に梟し檄文を四方に飛して高時の罪を鳴らかくと聞き高時い大に怒て令を下し新田氏を擊しむ是ふ於て新田氏を一族郎黨を會して戰守の措置如何を議するに或ひい利根川に據りて敵を拒ぐんとしひ或ひい越後に赴きてその宗族を譚らひ然して後戰えんと唱へ

討論駁議紛々置々區々まーく未だ決せず義貞の
弟脇屋義助獨り席を進み出で詞雄々しく論ずる
やう今大敵前にかくる益なき長議は空し
く時日を費やせたゝい自ら我が鋭氣を挫き禍
害を招ぐは異なるぞおの伜まーて亡びあた新田
氏い使者を戒め誅死されたりと人々は指笑せらる
おとなるべ此上あた遺憾は候らぞや奴輩は誅死
せらきんよう寧ろ王事に死ぞたあう今匹馬単兵さ
りとも出で国中を徇へて幸ひまーく衆を得べ則ち

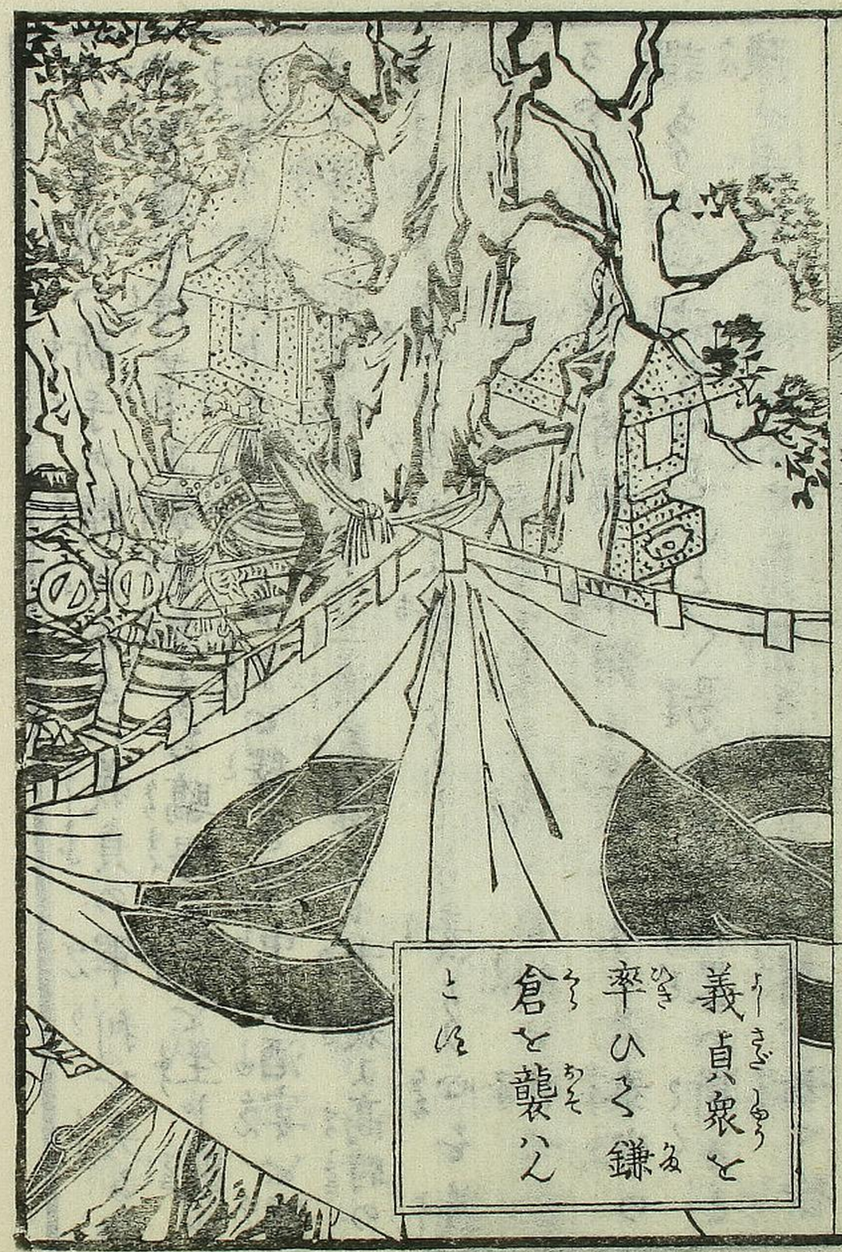
進んで鎌倉を攻めん兵集まらざるその時い其許は
く戦死おさんのと諸君孰を取たまへと勇ましく立ち
たる義助がたぐはの一言は励まされ衆人有理と衆
議一決乃ち兵を起せーるべ大舘宗氏堀口貞満岩松
経家里見義氏江田行義等僅に百五十騎餘義貞を
推して將帥とし白地は黒き筋を印せー新田源氏
の大旗を生品の祠前に植ぐ初めて義を挙ぐ実は
元亨三年五月八日なり義貞曩は護良より下し賜
る詔書を三遍朗讀し天地を拜して他あたと誓

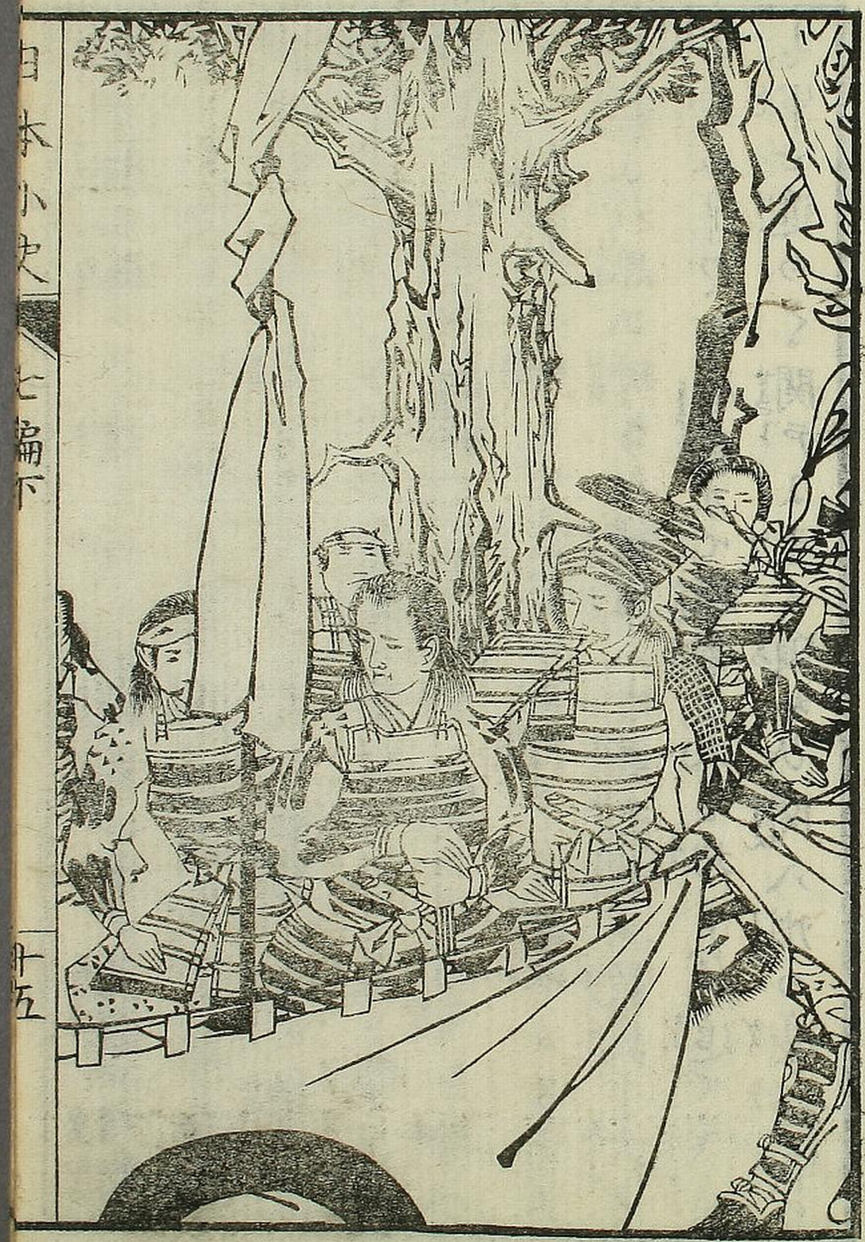
ひ進んで笠懸野に陣をおの日黄昏利根河原の
岸に傍ひ人馬の足音かまびすしく砂烟りと蹴立
て土砂とまた上げ此方とさしく馳来る容体正しく
敵とありひきや近づくまゝに見てかれば敵うへあり
で是ぞ主越後の宗族二千餘騎應援のため来り
しかれた諸軍あまに鋭気を増し喜び勇むその翌
日越後の全兵及び甲斐信濃の諸源五千騎を以て
馳加へ勢ひそんく盛んなり乃ち武蔵に進入を
近国の将士威風を慕ひ期せずして會するもの二

万餘人是に於て義貞總軍を総べ入間河の北岸に
陣を張りて鎌倉を呑まんとす高時義貞の事を
起すと聞えしも兒輩何をか為し得べきと更に意に
掛る色なく北條貞国全ドく貞将の二人に十一萬の
兵を與へ前後より〻来り撃つ貞国河の南に抵
り新田氏の軍威甚だ盛んなるを見て敢て進まず
義貞もまくもその機を察し諸軍を麾ねて流れを
渉り寄手の陣へ逆寄せに叫き喚んで攻蒐つ戦地の
名に高く武蔵野原視る眼も遠き逃水の乾きを果

ぞと見分る由なき平曠渺漠たる原野あり戰士そ
いづれも東国の驍兵素より騎戰に習練をあれを暫
し射戰に時を移し果て両軍入り乱れ追つ追まつ馳
廻り合ふて離れて合ふ烈戰およそ三十餘合
未だ勝負も決せざるに迭ひに疲労て相引に兵を收
めて引退く高時まさに泰家を遣はし精兵數万を引
引卒して貞國の援兵とし夜密に来りて神あり
ぬ身の義貞に敵の援兵来會せしと嘗て知る由な
きものゝ暁天を侵して戰ひしが我兵いたく疲れ

たるに彼に新手の精兵あるべ義貞の軍利を失ひ
賊軍勝を博せしに泰家忽ち驕慢の心を生じ敵を
侮どり軽んじて諸軍に甲を釋き陣中に酒宴を開
きて労を慰を相摸の人三浦義勝なる者曩に高時の
徵に應じて賊の軍中に在りたるものの素より心を義
貞に帰し兵六千を率ゐて来り属し委細を告て言
るやう戰ひ勝に將驕り卒懈る者は敗るとは泰家の
謂なり彼を破らんといとく易くその謀畧に斯々と
豫て手筈を謀し合せその翌る朝義勝に旗を巻て徐


義貞衆を
率ひて鎌
倉を襲ふ



々と敵に向ッて進み行くを賊軍いまだ義勝が内應せしを知らされば嘗てまさに怪しまざる稍近づたるその折しも一発の狼烟天に裂き雷鳴雲の烟りを暗号に左右より義貞の軍を分ちて夾み撃ち正面より三浦義勝今まで躬方と思ひの外戈を併べ矢を射かけ三面より烈しく火水に攻れと掩撃され思ひ掛なた賊軍は右往左往に散乱し大に敗走るしても皆走りて鐮倉に入る北条氏追て義貞軍を進めて関戸に至る頃ひ関八州の豪傑響の

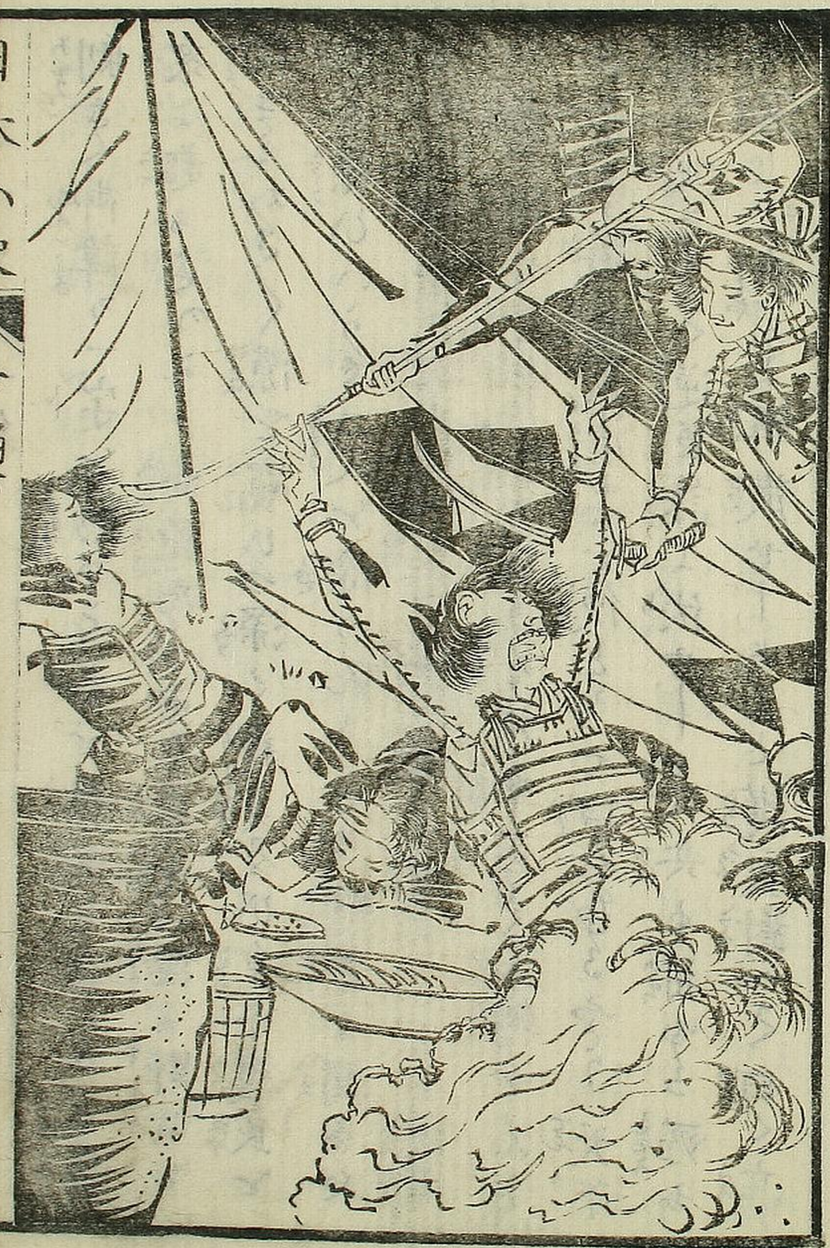
音に應ずる如く争そひて来り属き兵およそ十二万騎分て三軍とし三道よりして鐮倉を攻む大館宗氏江田行義は極楽寺より堀口定満大島守之は児嚢坂より義貞義助親子諸将を率ゐて假粧坂より火城沿道の民家五十餘ケ所に放ちて進む現あや大鵬の扶摇に搏つて九万里に上る猛勢あかくやとぞ目醒しく鐮倉の騒動大方ならず高時いよいよ怖ろしく北條氏の見兵猶十餘万騎分きて三道を拒ぐ義貞選兵二万を以て夜に乗じて進み入り彼方と

此を見るさせが敵の大軍海岸より擾りて柵を構へ海
より兵艦数十艘列を正して繫ぎあり防戦の準備厳
重にして擊べき間のなりざれを義貞思ふ仔細やいか
ん馬より下り冑を脱ぎ海に向ひて再拝して曰く
恐き多くも聖天子まつろへ逆臣の為に左遷の身となり
たまひ西の陸なる嶋国に幽苦の年を重ねたまふ臣
義貞おの慘状を見るに忍びず慷慨悲憤措くこと
く身を國家の犧牲とし兵を挙て賊を擊つ海神若し
靈あらば臣義貞が微忠を察し此潮を干て進取の便

路を開きたまへと数回祈念して腰に佩びたる家の
重宝黄金装の太刀を釋て海中に投ずいなく海神
に供へしが不思議なるかな その暁天潮大いに退き
て海面干潟となりて兵艦ども漂ひ去る是
あぞ勇む新田勢直ちに府中に進入して市街各所に火
を縦て折しも烈しき風に連れ焔忽ちに天に漲
ぎり渦巻のごとる黒烟の下を潜りて義貞八巧みに兵
を指揮して難なく幕府を攻め落し北條氏の第
残取囲み四方よりして火を放つ勝に乗じて攻撃れ

賊軍爰に勢ひ窮まり高時をとどめ一族郎黨長安一片三月の烟りと倶に消て行く哀れ果敢なき栄華の夢醒て跡なく誅に伏し猛火のうちに自焼して骸も止めず失ぬ」頼朝天下に覇業を企ざて府を鎌倉に開きてより源氏三世藤原氏二世親王四世而して北條氏陪臣の身をいて権をその間に執る者九世凡そ百五十四年ぬしく古ぶ義貞兵を挙てより此に至りて十有五日威名関東に振ふ捷報恰も後醍醐帝が闕に還るの途上兵庫に達を詔のりして義貞を左馬助に義助を兵庫助に任ぜ」去わどに正成を金剛山の重囲解しうべ帝の闕に還ると聞き七千騎を以て兵庫に迎謁を帝厚くその功を賞し詔のりして先駆たらしめ闕に還る新帝(光厳院)高時の立る所)を廃し再び位に復したまへ」朝廷大いに戦功を論ず正成を摂津河内和泉の守護とし名和長年菊池武重伯耆の守護とし義貞以下その功に應ず勲賞その差ある中に帝京師の復せしへ足利高氏の功莫大なりとして首として抜擢し恩賞頗る當に過

三浦義勝密ニ義貞ニ通ジ曉リニ望ミ北條勢ヲ大ニ惱ませ



剰さへ御諱の一字を賜ひて名を尊氏と改め官爵
衆に超るそのうへ尚飽たらぬや尊氏は陰に野心を
挾さしかさく隙を窺ひつ深く義貞及び皇子護良を
忌み嫌ひいうを二人を除かんとその奸策に間あれ
を知るやそうばや護良は帝の闕に還りて近幾
の兵を轄て志貴山に在りそ紙率ゐて入朝せんと
を帝参議藤原清忠を使として曰はしむるやう天下
既に定まりて逆臣誅に伏せ上は兵も用ゆる所な
し至急速に解散せよと護良對へて曰く高

時既に亡びしうど餘黨いまだ全く盡き尽くし武
備と厳しくして以て不虞に備ふべし且陛下の德に
より微臣等幾千の艱苦を嘗め風に櫛づり雨に浴
し漸やく今日の結果を得たりさりとて何ぞや足利
尊氏奪ひて己が功とみし驕慢不敬至らざるなし
嫩葉ふしく刈ざれを斧と用ゆるの患へなりと世
の俚諺にいへるごとく高時亡びくまさ一個の高時
を生ぜん願くは陛下熟慮せよと帝その言を懌ばず
ず護良を拝して征夷大將軍とし軍旅の事を統轄せ

しめ草ゐ尊氏を誅さる紙許さぞ互ひゝ和解せ
めんとて頻りゐ心を労ーたまゝ護良志ーまゝく
堅く只管尊氏を除うんと欲ー密うゐ兵を徴ー集
むるその檄文を尊氏い打見て獨りうち點頭き一ッ
の奸策と廻らーく帝の寵姫藤原氏ゐ依ゝまゝ
護良を陷いまんと大将軍謀叛ーたまひ帝を廃ー
くその子興良を立んぞ結構ゆり証憑い則ち拳兵
の檄文紛まゝく候らゝと誠ーやうゐ讒訴の佞辯傍
らようーく藤原氏倶ゐ尊氏の讒訴と助け尚とゐ

かくと煽動を嗚呼恐るべー女謁内奏帝遂ゐ奸臣
と寵姫が詞ゐ迷いさま親子の情義と辟ぎて恩愛
の覊を断たまひ力士紙帷幕の中ゐ伏ゐた事ゐ托
つけ護良を召ま かくとも知らね護良い召ゝ應ドて
入来ゐ紙待設けたる駄多の力士物をもいたゞ前
後ようー群がりかゝるゐ驚く護良ゆ狼藉と言せも
敢ま矢庭ゐ大勢をー重ゆ遂ゐ縄とぞ掛たりゆる
護良憤怨ゐ堪ぬりゆゝ幽囚の身とゆうー不幸を
酷くうち嘆き上書ーて寃を訴ゝゝ其書ゐ曰く

臣以罪累敢訴寃枉唯陛下憫察之臣夙憤武臣專恣釋法衣被戎衣寧受世譏而為君父忘軀在廷臣子莫敢效力而臣獨張空拳以抗強敵賊之耳目集於臣身購臣以萬戶臣晝伏夜行匿山谷踐霜雪殆死而復生者數焦思運籌遂得底誅夷之績而不圖獲罪於此仰將訴天日月弗照不孝之子俯將哭地山川弗載無禮之臣父子義絶乾坤共棄臣不敢復有望於世也儻宥死刑削髮歸佛臣終身毋悔抑申生死而晉國亂扶蘇刑而秦世衰聖明盍延古以鑒今焉涕隕心慟不終所欲言

と悲憤の情狀筆紙に溢れ讀者をして慘然たらしむ去れども人々尊氏と寵姫藤原氏が權威に懼れ此書を奏達するものなく空しく中間に隔られ親子情義隔絶して讒者ハ益く時を得て護良の從者等官を流され又も誅せらるるなり遂に鎌倉に護送て足利直義に附せ（直義ハ尊氏の弟なり）直義土宮を二階堂の谷に穿ちて護良を幽閉せ」建長二年秋七月賊の餘黨北條時行殘兵を集めて旗幟拳

數々鎌倉を攻む直義迎戰利を失ひ終に賊の破る処となり鎌倉を捨て走るの際その臣淵邊義博と召し密かに内意を示して曰く時行今は盛なるも始終全くを得るものあらん孫を敢て恐るゝに足らず只恐るゝ所は兵部卿護良ふ

て我が後来大望の障碍となるやも必せりかくて乱雜の時に乘じ汝よく我が為に疾く護良を殺せ

しとのふに義博心得たりて土窟の傍に潛び伺ひ窺ふ様子を窺へば燭火の許に護良の色青ざめて痩衰へ頬骨暴て眼凹み躯枯たる声を上て般若経を讀誦して在りが今義博が刀を接き持ち後の方より窺ひ寄るを迅くも見認めず蹶然と振向く塗炭に義博が撃込む刀尖傍るる机とのりて丁と受とる怒る声をふ足立て無禮奴めと叱咤して寄らんと進む紙此方もさる者義博をつきぶ刃をひら焦つて撃込む二の太刀を受損じたる護良の膝を飽まで穿つて深痍に堪らず仰天に堂と倒るゝ胸元を蹂躙りて吭を刺もある口惜と護良の頸を縮め

淵辺義博
宮と土牢
の裡ま
弑せ

て義博が持たる刃の鋒尖と噛折る不敵の勇憤死カ
ら驚く義博副刀を拔く手も早く心元を鍔も徹と
刺貫ぬくさしも剛氣の護良もそのまゝ呼吸を絶
てなり痛ましうる護良に忠勇無雙なるものゝ
二十八年を一期とし逆臣の手に弑虐せらる是も
さ天欽將命欽歎ぎるに尚餘りなり」是時に當りて京
師に賊の餘黨亂を作し終に鎌倉を攻め落し勢ひ
まさく盛んなりとの警聞に達せしうを討手の大將
を擇ぶに足利尊氏自ら請て討手の大將に任じ東

伐せんを請ふ朝議あるを許さ又征夷將軍に任
ぜんと請ひしに賊黨平らぎ後何分の詮議
に及ぶべしとその請を許されぬ尊氏大ひに不平
を懷き寵に誇りて朝廷を蔑如し出陣の時日を告
ぎしく私檀に途に上り矢矧驛にて直義に出遇ひ
海道にして進擊の鋒尖鋭にして破竹の猛勢時行
の兵と七たび遇び七たび戰ひ七たび捷つ向ふ前
に敵兵を立足もなく敗走し遂に時行は戰死せ
しうべ一挙に鎌倉を恢復したる尊氏が威權関東

と歴し稍反状を現出して書を朝廷に上つり義貞と罪状しく追討の倫旨を請求して而して自ら征夷将軍関東の管領と称し畢竟尊氏反して世運の沿革治乱得失什麼する形状を現出する次編の発兆を待ちたまへ

通俗日本小史七編巻之下終

函館　魁文社
信州諏訪　藤森平五郎
仝　宮坂喜與次
仝　吉左衛門
仝　武居茂吉
仝　丸屋庄兵衛
仝　高美甚左衛門
松本　小松爲吉
仝　大塚八十兵衛
仝　竹内禎十郎
仝　篠田重平
仝　宮島市三
仝　柳澤德彌
上田　小山佐傳次
仝　九郎兵衛
仝　矢島金八
仝　十一屋半四郎
仝　上の屋辨吉
小諸　小桝屋喜太郎
高遠　成田良三郎
飯田　
常磐城　
長野　

大阪　前川源七郎
仝　岡島眞七
阿州徳島　坂井万吉
飛彈高山　桝屋重兵衛
遠州掛川　三原屋甚藏
尾州名古屋　美濃屋代助
仝　清七
仝　梶田勘助
甲府　東浦榮次郎
仝　小西屋庄左衛門
仝　五明堂正八
仝　藤森善七
仝　今津美之助
駿州静岡　杉本平七
仝　喜多川屋茂右門
仝　大和屋利兵衛
相州御殿場　曾比屋平七
仝　翁屋重兵衛
仝　小田原川上九兵衛
仝　藤澤釜屋清兵衛

越後	新潟	林富吉
仝	越中屋長八	仝
仝	仝與八	仝
仝	淺野六平	仝
仝	三條	樋口屋小左衛門
仝	仝	淺間屋傳左衛門
仝	加茂	丸山音八
仝	仝	番場吉次郎
仝	水原	西村六平
仝	沼垂町	山本屋久兵衛
仝	仝	中村政治
仝	高田	藤屋直三郎
仝	仝	寺島權四郎
仝	六日町	目黒宗內
同	長岡	與板屋重吉
仝	仝	山口万吉
仝	仝	加藤利七
佐	渡	万屋長藏
仝	相川	本間孫治
仝	新穗	國本吉右衛門
越	中高岡	

仝	厚木町	高梨與左衛門
仝	仝	文明堂
仝	横濱	伊勢屋梅藏
仝	仝	池田孝吉
仝	武州熊谷	田澤多一郎
仝	仝	杉浦平左衛門
仝	鴻ノ巢	近江屋平吉
仝	仝	長島爲一郎
仝	浦和	中村朝次郎
仝	仝	本屋文藏
仝	八王子	小町屋德次郎
仝	秩父	大澤鶴四郎
仝	仝	井巴
仝	本庄	諸
仝	仝	森田芳次郎
下	總佐原	堤正平
仝	仝成田	淺井小三郎
仝	仝境町	高木直次郎
仝	仝野田	梅屋林藏
常	州太田	會津屋茂兵衛
仝	土浦	塚本權左衛門

仝	北野半七	江口平左衛門
仝	加州金澤	新井金太郎
仝	仝	西江屋勇藏
仝	磐城三春	万年忠兵衛
仝	仝	田中庄太郎
仝	桔梗屋定藏	龜桝屋卯兵衛
同	西村重兵衛	文心堂
仝	關屋喜六	藤屋勝藏
仝	鍵屋平兵衛	橋本屋文次郎
仝	近江屋周助	塚田屋佐太郎
岩	光白屋清二郎	山田屋金兵衛
代	都田誠	松野屋貞吉
福	島屋兼吉	小林源次郎
島	上野屋彦太郎	千卷屋喜平次
仝	鑑屋善兵衛	岸巳之助
仝	渡邊彌助	三陸屋利兵衛
仝	齊藤八四郎	山口敬之助
仝	田中善平	島屋正之助
仝	針道村	澤田正助
仝	川俣	井筒屋兼松
仝	若松	前右の卷
仝	佐治善助	若柳
仝	瀨の屋作右衛門	陸盛岡
仝	文字屋太右衛門	中黑澤
羽	荒井清作	仝
前	八	
山		
形		

全　高畑　佐竹久六
全　谷地　長谷川虎次郎
全　上の山　田宮五郎
全　相原多吉
全　萬屋利七
全　米澤　大坂屋清兵衛
全　辰己屋吉三郎
全　小出　須佐擢平
全　米澤　素月最平
全　村上屋丹七
羽後　秋田　本間金之助
全　和吉
全　戸島和助
全　戸島吉五郎
全　大曲　能味直治
全　佐々木長藏
全　能登山五右衛門
全　松本　叶屋次郎兵衛
全　酒田　白崎善助
全　鶴岡　五十嵐久助
全　京田屋孝次郎

全　登米　阿部清助
全　七ノ戸　加賀や清四郎
全　田中彌兵衛
全　八ノ戸　浦山太郎兵衛
全　福永豊吉
陸奥　弘前　山形多助
全　宮本甚兵衛
全　武田莊七
全　柿崎忠兵衛
全　青森　池田吉助
全　麹口喜助
全　渡島函館　關清六
全　祐村佐助
全　藤吉
後志　小樽　佐々木常吉
全　上野藤太郎
全　山中量平
全　福井音松
全　石狩札幌　大社源造
全　駒吉

版權　明治十四年四月三十日
免許　同十　年　月出版
編輯人　大阪府平民　渡邊義方
日本橋區濱町三丁目壹番地寄留
出版人　東京府平民　辻岡文助
同區横山町三丁目二番地

010190512962